



Title	宗教的体験談の受容
Author(s)	川端, 亮
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2013, 39, p. 199-215
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24782
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宗教的体験談の受容

川 端 亮

目 次

1. はじめに
2. 体験談の研究
3. 予備調査と本調査の方法
4. 結果
5. おわりに

宗教的体験談の受容

川 端 亮

1. はじめに

宗教研究は理論においても実証においても、欧米のキリスト教をベースに発展してきた。理論においては、世俗化論や合理的選択理論から欧米の宗教状況が論じられ、一方の実証においては、数十カ国が参加するヨーロッパ価値観調査や世界価値観調査、ISSP (International Social Survey Programme)調査などによって、キリスト教を中心とした宗教性を含む国際比較調査の計量分析が行われ、多くの注目すべき成果が発表されている(Inglehart & Baker 2000、Halman & Draulans 2006、Finke & Adamczyk 2008)。このように宗教研究はキリスト教をおもな対象として研究が進んできたが、キリスト教の伝統と大きく異なる日本においては、たとえば「神」、「宗教」、「スピリチュアリティ」などの基本的な言葉からしても、その意味するところは大きく異なる。宗教研究にとって「神」の概念は、最も重要なものといえるだろうが、キリスト教的な a God や a personal God などは日本語への翻訳が難しく(真鍋2010)、かなりの工夫をしなければ、日本の宗教を世界の宗教研究の中で同じように論じることはいかならう。そして現在までのところ、日本の宗教がグローバルな研究のレベルで語られることは、非常にまれであるといつてよい。

日本の宗教研究の閉鎖性を乗り越えるためにも、国際比較研究を行うためにも、日本にも欧米にも広く通用する枠組みを用い、客観的な方法、普遍的な測定に基づいた調査研究が必要である。本稿では、宗教的な体験談を対象として、体験談を個別の教団宗教の文脈から切り離した、状態が遷移するというモデルをたて、一部の要素を入れ替えた体験談を対象者に示し、その反応を調べるという調査方法を試みる。

2. 体験談の研究

2.1. 対外的体験談と教団内体験談

宗教、とくに日本の新宗教においては、体験談が非常に多く語られている。インターネット上で検索してみれば、数多くの教団の体験談を見ることができるし、また、一般の書店で入手できる教団の出版物にも体験談が数多く掲載されている。このような体験談は、宗教を信じていない人でも、みたり聞いたりする機会はあるだろう。そして、怪しい、いかがわしいと思い、教団を拒絶したり、あるいはまれには、なるほどなど感じて、教団に理解を示す人もいるかもしれない。このように体験談は教団から外部に向け

て発信され、それをみたその宗教の信徒以外の人に反感、反発を引き起こしたり、あるいは逆に理解、共感を得て、さらには宗教間対話につながることも考えられる。このように、体験談が反感を生むか、共感を生むかは社会における宗教の状況にも影響を与える可能性がある問題である。体験談によって、宗教間の相互の理解が進み、宗教間対話につながるのならば、体験談研究もさらに実践的な価値を得るだろう。

多くの人にとって体験談は、このような外部に発せられるものとしてしか存在しないが、一方で、実際には教団内部で共有されている場合の方が多いかも知れない。教団内部では、信徒の信仰を深める一助として、信徒の集まる集会において、体験談の発表、共有が頻繁に行われている。このような体験談は、もちろんすでに数多く研究されてきた。たとえば、大本についての日野(1982)、妙智會・立正佼成会・天理教についての島藺(1985)、オウム真理教についての弓山(2004)など多数ある。それらは、教団内での活動や教団の信仰体系全体の中での信仰強化の解明を課題としてきたといえるだろう。

これらは書かれた体験談、すなわち教団の刊行物をその資料としている。そこでは、教団による体験談の選別の過程があり、信徒の教化に適する体験談が選ばれ、教団の手による編集・変更が加えられるのは避けられない。そのため、研究者が信徒から直接聞き取った体験談は、生の体験談として重要である。

信仰者が体験談を語ると、それは個人の宗教的ライフヒストリーとなる。したがって、ライフヒストリー研究の成果を鑑み、その観点からの研究も、あまり多くはないが蓄積されている。川又(2002)、川又ほか(2006)などが質的調査法としてのライフヒストリー研究法に注意を払った分析が行われており、個人史と信仰、個人と歴史、継承、地域への関心の観点などから分析されている。また、秋庭・川端(2004)、芳賀・菊池(2006)は、特定の教団の個人のライフヒストリーに焦点を当てている。これらは詳細ではあるが、一つの教団の中で特徴的な宗教的要因の抽出にとどまっている。

2.2. 体験談研究の問題点

書かれた体験談とライフヒストリーのいずれを対象とするものであっても、従来の体験談研究は、基本的に個別の教団研究にとどまるものであった。つまり、教団特有の何かが書かれ、その特有の記述がどのように信者に影響するのかが問題とされてきた。つまり、体験談の内容すなわち教えと、表現すなわちレトリックの問題を主として扱っていたといえるだろう。たとえば、中心と外側、肉と皮を扱っており、骨格を扱ったものはなかったといえる。体験談の中の教えとレトリックは、教団ごとに大きく異なる。日本に限定しても教団間の比較すら充分に行いうる枠組みは見いだせていない。教団間、さらには国際比較のためには、体験談がいかに書かれているかというその骨格、すなわち「構造」を問題とすべきである。そこで、本研究は、Anderson(1988)の物語論の観点を取り入れ、体験談の語りの構造を日本に限らず普遍的に共通の枠組みでとらえることを目指す。

体験談をある種の構造、いくつかのステップにとらえること自体は新しいことではなく、宗教社会学の領域で、回心過程の研究として、数は多くはないがなされてきた。鈴木(1970)においては、創価学会の信者を対象に1)状況規定、2)状況規定を組織的に指示していた客観的諸条件の変化・都市化と全般的落層化、3)移動の効果として、とりわけ一次集団の弱体化・心的孤立と不安定・緊張・欲求不満などの12段階からなる回心過程が提示されている。また、森岡・西山(1979)では、妙智會の地域への浸透から個人の信仰の受容に関して、11の条件をあげ、それらのいくつかが組み合わさって、信念体系の変化は生じるとしている。さらに海外ではロフランド＝スターク・モデルが有名である(Lofland and Stark 1965)。これは、アメリカのカルト的な宗教運動から入信過程を7つの段階に分けたものである。これらの研究は、いずれも特定の教団が念頭にあり、さらには普遍的なモデルを目指すにはプロセスが細かすぎるという欠点を持つ。

Anderson (1988)は、日本の3つの新宗教(善隣会、立正佼成会、崇教真光)の体験談を分析した点が特徴的である。特定の教団1つだけではなく、3つの教団を扱って、体験談には、要約、オリエンテーション、危機、改善過程、不和、解決や和解、結びの7つの項目があるとした。その中で中心的な部分は、危機、改善過程、不和、解決の4つである。

2.3. 体験談の状態遷移モデル

本研究は、とくにこのAndersonの研究に基づき、その後の変化の項目を加えて、さらに名前を中立的なものに変えた、「初期状態」「教義に基づく実践」「結果状態」「結果への解釈」「信仰・信念の変化」の5段階から体験談は構成されると考える。

初期状態は、信仰に入る前の状態、状況であり、剥奪理論に倣っていえば、入信時の貧・病・争の状況や自己実現や心の安定の希求度合い、その時の靈性や超越志向の程度などの状態である。この状態の後に、入信という過程が始まるとする。

2番目の教義に基づく実践は、何らかの宗教的な行為を行う段階である。ここにおいては、宗教的な儀式・儀礼を行うという側面と、特別な場所や特別な時ではなく、普段の日常生活における心構えや行動指針などの側面の2つに分けて考える。

3番目が結果状態で、実践によってどのように変わったかということである。もちろん、変化なしという状態も含まれる。

そして変化が信仰に結びつくためには、結果への解釈——結果の認識やそれによる満足の度合いなどを含む——が重要であろう。それが4番目の段階である。

そして最後に信仰や信念が強化される、あるいは、信仰を中断、あるいはやめるということもよくあるだろう。

以上を体験談の基本構造と考え、状態遷移モデルと呼ぶ。体験談は、この基本構造にそれぞれの人のエピソードを載せたものである。

体験談は、本当に区別できる5つの段階、すなわち基本構造があるのだろうか。それを検証したのが、河野である(川端 2012、p.139)。河野報告では、2007年4月から2008年1月

にかけてインターネット上で収集した966の宗教体験談を分析した。

966の体験談1つ1つから「初期状態」「教義に基づく実践」「結果状態」「結果への解釈」「信仰・信念の変化」のそれぞれに該当する部分を抽出する。そして5つの段階ごとにそれぞれ966の宗教体験談から抽出された部分だけを集めて、分析した。その結果、「初期状態」では、「病院」「ガン」「手術」「薬」など、病気関係の言葉が多く出現し、「母」「父」「主人」など「家族」に関する言葉もまた多かった。

「教義に基づく実践」では、「祈り」「祈願」「題目」「唱題」「浄霊」など、教団に専門的な用語が多くみられた。

「結果状態」では、「家族」に関する言葉が多いことと病気に関する用語が多い点が、初期状態と似ている。しかし、「喜び」「おかげ」などの言葉や「結婚」「就職」などの成果を表す語がみられるのが、「初期状態」との違いである。形容詞に関してしてみると、「初期状態」では「悪い」、「苦しい」がみられるが、「結果状態」では、「よい」、「楽しい」、「明るい」がみられる。その他、「手術」「ガン」「仕事」「できる」などの言葉が「初期状態」と「結果状態」との間で出現率に統計的に有意な差がみられた(図1参照)。

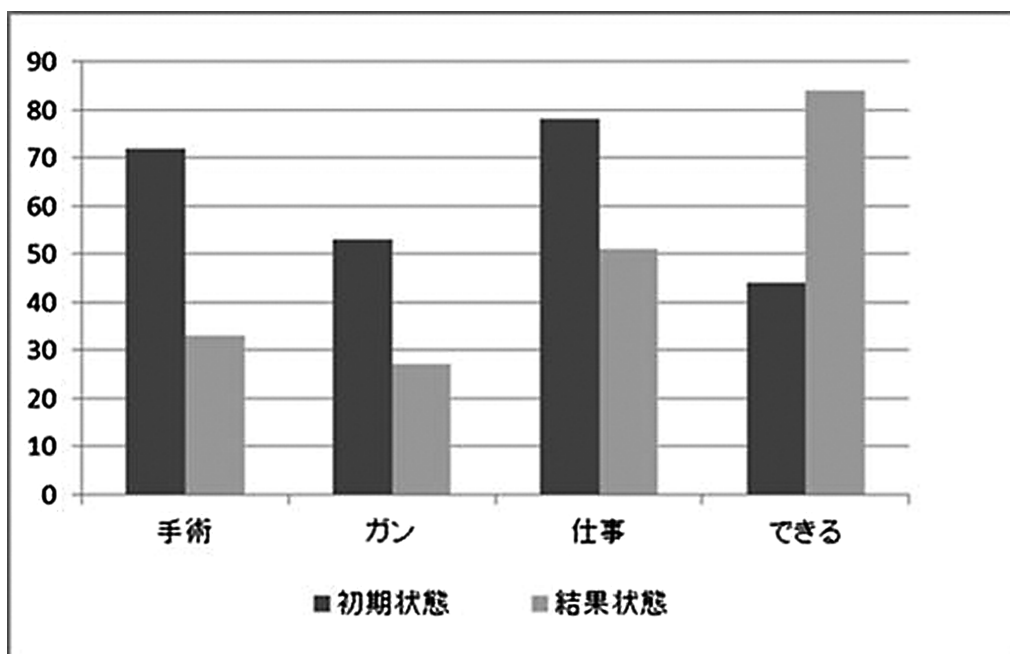


図1 初期状態と結果状態の特徴的な語の比較
(川端 2012、139頁、河野作成のグラフより)

この結果は非常に当たり前のことを示していると思われるかも知れない。しかし、このように非常に明瞭な結果が出たことが、体験談を状態遷移モデルで扱う正当性を示している。体験談は、いうまでもないことだが、その内容が1つ1つ大きく異なる。この多

様な体験談は、テキストマイニングを使ったとしても、データをそのまま、すなわち状態遷移モデルに合わせて5つに区分せずに、そのまま分析に投入しただけならば、解釈できる有効な結果を導き出せなかった。しかし、基本構造の5段階ごとに区分し、それぞれの段階のデータを抽出して分析すると、各段階に特徴的な言葉が明らかになり、それらの特徴的な語の組み合わせパターンから、体験談の各段階の特徴や構造が明らかになるということが分かった。つまり、5段階に分けることが有効であり、この5段階が少なくともこの分析に用いた966の体験談の普遍的な構造といえる点が、河野報告の特筆すべき点である。

5段階のそれぞれには、いくつかの要因が含まれる。たとえば、初期状態には「経済的困難」「病気」「人間関係の問題」「精神修養」などの要因があると考えられる。同様に、教義に基づく実践においては、「通俗道徳的日常実践」「行や出家などの非日常の実践」を、結果状態には、「初期状態から脱する」「初期状態から脱しない」、信仰・信念の変化には、「信仰獲得」「信仰強化」「信仰破棄」を考える。結果への解釈には、さまざまな解釈があり、たとえば単純なものとしては、結果への「満足」や「不満」が考えられる。

3. 予備調査と本調査の方法

3.1. 予備調査の方法

本稿では、このように考えた体験談のモデルに基づき、構成した体験談を調査対象者に示し、それが受容できるかどうかを尋ねた。たとえば、初期状態において、経済的な困難で始まる体験談と病気で始まる体験談を用意する。この2つの体験談において、実践や結果状態など、他の部分は全く同一とする。この2つをそれぞれ別の対象者に提示し、その受容度を比較するのである。こうすることで、たとえば、経済的な困難の体験談の方が、病気の体験談よりも受け入れやすいということが明らかになる。この方法で、すべてのパターンを調べようとする、先に挙げた例にもとづけば、初期状態には「経済的困難」「病気」「人間関係の問題」「精神修養」の4パターン、教義に基づく実践においては、「通俗道徳的日常実践」「行や出家などの非日常の実践」の2パターン、結果状態には、「初期状態から脱する」「初期状態から脱しない」の2パターン、信仰・信念の変化には、「信仰獲得」「信仰強化」「信仰破棄」の3パターン、結果への解釈には、たとえば、「結果への満足」と「結果への不満」の2パターンとすると、 $4 \times 2 \times 2 \times 3 \times 2$ の合計96パターンの体験談が必要であり、それぞれの体験談を読む人を20人としてもおよそ2000人の調査対象者を必要とする。

このような大規模な調査を実施することができなかったので、まず小規模な予備的な調査を実施した。質問紙法で要因の組み合わせを尽くすためには、要因を確定し、組み合わせに沿った短い体験文を作成するという方法をとることにした²⁾。そして18通りの短

い体験談を作成し、一人の対象者にそれら18個の体験談を読んでもらい、それぞれに信じていることができるかどうかを尋ねた。体験文は以下のようなものである。

私は失業して家族を養うことができない状態だった。私は、唯一の正しい宗教だと主張する宗教団体に入信した。教団の教えにより、世界の終りに救済してくれる神に祈った。自分の気持ちや直観に正直に生きるようにした。すると、ある日宇宙と一体となったように感じた。その後、問題は完全に解決し、むしろ人が羨むような状態になった。同時に、心の平和を感じていた。

調査は、2011年に日米を対象に、インターネット調査で行われた。日本344、米国330の回答が集められた。そこでのもっとも大きな発見は、日米の間では宗教に対する考え方等、大きな違いがあるように思われがちであるが、文化的な要因をできるだけそぎ落とし、短くした「体験文」の受容／拒絶に関しては、日米で大きな違いがみられなかったことである(川端 2012、p. 140)。体験文を用いる調査方法の利点は、実験計画法的調査に必要な体験文を、要因を組み合わせて必要なだけ作ることができること、現実の体験談は、2千字や3千字にも及ぶので、一人の対象者に複数の体験談を読んで、回答してもらうことは負担が大きすぎるが、短い体験文ならば、一人の対象者に複数の体験文を読んで回答してもらうことが可能で、サンプル数が少なくすみ、調査費用が数分の一に縮小できること、が挙げられる。

しかしながら一方で、2011年調査への対象者の感想として、「体験文は短すぎて、具体性がなく、判断できない」「一人が読む体験文が多すぎて、わけがわからなくなる」という不満がみられた。いずれの感想もこの方法の欠点を示しているといえるだろう。

3. 2. 本調査の方法

本稿が基づく調査は、調査会社のパネルを用いたインターネット調査で2012年の2月から3月にかけて行った。2011年調査とは対照的な方法を、調査方法の試行錯誤の1つとして行った。そこでは、800字程度の体験談を1人の対象者が1つ読む、という方法をとる。体験談の状態遷移モデルに沿っていえば、とくに教義の実践に基づく部分に焦点をあてて、実践部分に関して、以下の3つのパターンを用意した。パターン1は、宗教的ではあるがそれほど超越性の高くない実践、すなわち聖なるものを身につけるような行動を行うことを例とする。パターン2は、宗教的な行動として、悪魔払いを行うことを例とする。パターン3は、人格神ではない非人格的な原理を信じることにする。

この調査は、本稿の目的以外にも、宗教の体験談モデルを構築するために、体験談の要因を組み合わせた体験談を対象者に提示し、体験談提示前(1回目調査)と提示後(2回目調査)によって、宗教的な考え方に変化がみられるかを確かめる目的もあるため、調査手順は複雑になっている。

調査においては、まず、信仰区分を問うスクリーニングを行い、特定の信仰傾向を持つものに対して、2回の調査を行う。スクリーニングは、宗教に対する関心を問い、「信仰あり」「信仰はないが宗教には関心あり」「信仰もなく、関心もない」「宗教は嫌い」の4カテゴリーから選択してもらう。そしてそのうちの「信仰あり」「信仰はないが宗教には関心あり」「信仰もなく、関心もない」の3カテゴリーの人を対象に2回の調査を行った。

1回目の調査は全員に同じことを尋ねる。2回目の調査は、6種類の調査票があり、3カテゴリーに均等に割り当てた。最終的に合計900以上の回答が得られることを目標とした。

第1回本調査と第2回本調査の間は、3週間程度の間隔を設け、第2回調査の回答者は、第1回調査の回答者であることとした。すなわち、パネル調査である。

調査対象者は、20歳代後半(25-29歳)と40歳代後半(45-49歳)の日本人男女とし、信仰の3区分ごとに男女各年代で75以上の回答が得られることを目標とした。

また、新しい構想に基づく調査であり、類例が見られなかったことから、どのような結果が出るのかが予想できず、より確実を期すために2回の調査のそれぞれにおいて、事前調査を行った。事前調査とは、1回目、2回目のそれぞれの調査において、90サンプル程度を本調査の前に先んじて回収するものである。その結果を見て、質問文が適切であるかを判断した。

第1回調査については、事前調査の結果、質問文は適切と判断され、変更なしとして本調査を行なった。第2回調査については、事前調査の結果から、質問文を変更し、本調査を行った。第2回調査の事前調査に回答した者の、第2回調査回答は無効回答として破棄したが、第1回目の調査への回答は有効回答としてデータに含めている。体験談への共感の質問は、この調査の2回目に行われた。提示されて体験談は、以下のものである。

私は、あるメーカーに勤める35歳のサラリーマンである。私のこれまでの人生は、特に大きな苦難もなく、どちらかといえば恵まれた人生だった。

だが、ある時期から、私は人に言えないような深刻な悩みをかかえるようになった。そんなある日、私は知り合いからある教団に誘われた。その教団は、私の信条と一致する教義を教えていたことが気に入り、何度か通うようになった。そうするうちに、自分のかかえる問題も解決できるのではないかと期待するようになり、やがてその教団に入信した。その教団では、次のような特徴的な教義も持っていた。

<改ページ>

人間の幸福や不幸を決める本当の原因は、人間をはるかにこえた大きな力である。それは、人間レベルの思いや倫理をこえた原理である。世の中には努力しても失敗ばかりで貧乏な人もいるし、悪い事はしていないのに大きな病気をする人もいれば、他の人とはうまくいくのに上司との折り合いが悪い人がいる。人間が道徳的にふるまい、よい人間であろうとしても、それだけで自分のあり方がすべて決まるわけで

はない。人間のレベルをこえた大きな力が、幸せな人生を送れるかどうかを決定しているのである。

<改ページ>

大きな力の恩恵を受けるために大切なことは、教団の与えてくれる聖物を肌身離さず持ち、いつもあがめることである。古代から人々はさまざまな聖物をあがめてきた。この教団では、聖物は大いなる存在の力を媒介して私たちに直接その力を伝えてくれると教えている。聖物をいつも持ってあがめ、そこから神の聖なる力の恵みを受けることが、私たちが幸せになる近道なのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

本当の宗教は、単なる人間レベルの道徳ではない。宗教は、悪い力の影響を退け、もっとレベルの高く大きい力を受け入れ、人間を心身ともに幸福にするものである。

<改ページ>

私は一生懸命その教えを実行した。そして、驚いたことに自分のかかえていた問題は、解決してしまったのである。その後、私はますます熱心に行うようになり、本当に幸せになった。この素晴らしい幸福をさずけてくれた教団に本当に感謝している。

「大きな力の恩恵を受けるために大切なことは、教団の与えてくれる聖物を肌身離さず．．．」の部分で3パターン用意し、対象者によって、入れ替えた体験談を提示した。「聖物を肌身離さず」がパターン1で、パターン2、パターン3は、以下の文章である。

パターン2

大きな力の恩恵を受けるために大切なことは、教団の教える悪魔はらいの秘儀を自分で毎日行うことである。古代から人類は、さまざまな形で神の守護の妨げになるものをさけ、おはらいをしてきた。この教団では、悪魔や悪霊をはらうことができれば、大いなる存在の力を身体いっぱいを受け取ることができると教えている。目に見えない悪い力をさけることが、私たちが幸せになる近道なのである。

パターン3

大きな力の恩恵を受けるために大切なことは、神とは究極の存在であり、非人格的な原理であると信じることである。古代から聖者と呼ばれる人たちは、この非人格的な原理に触れ、それを物語やたとえ話や擬人化してわかりやすく説いてきた。この教団では、神を姿や形で判断してはいけないと教えている。大いなる存在の真実の姿とその力を知ることが、私たちが幸せになる近道なのである。

また、日本においては、一般に「宗教」と聞くだけで拒絶されるともいわれる。そこで、上記の体験談中の「教団」という語を削除し、「ある人」に置き換えた文章を、聖物、悪魔払い、非人格神のそれぞれに用意した。これがパターン4、5、6であり、合計6パターンの体験談を作成した。これは本当の意味での体験に基づくものではないので、構成された体験談である。

4. 結果

まず、得られたデータの信仰区分は、「信仰あり」の人が317人(31.8%)、「信仰はないが宗教には関心あり」が345人(34.6%)「信仰もなく、関心もない」が336人(33.7%)であった。

表1 提示文書に対する受容の度合い

	度数	パーセント
受け入れられない	370	37.1
やや受け入れられない	218	21.8
どちらともいえない	311	31.2
やや受け入れられる	84	8.4
受け入れられる	15	1.5
合計	998	100.0

提示文書を示した後に、「以上のような文章をあなたはどの程度受け入れることができますか。」と問うたところ、「受け入れられる」かまたは「やや受け入れられる」と答えた人は、998人中99人、およそ1割の人であった。また、「どちらともいえない」と反感を示さなかった人が31.2%であった。直接比較できる調査データはないので、これらの数値を高いとか、低いとか、判断することはできないが、このような宗教的な体験談に拒絶反応を持たない人がある程度おり、その中の一部は共感を示す可能性があると考えてもよいのではないと思われる。

この提示文書の受容の度合いを従属変数として、属性、調査パターン、多元主義、宗教意識などの項目を独立変数として、重回帰分析を行い、どの変数が影響を与えるのかを調べた。

表2 属性を独立変数とした重回帰モデル

	b	標準誤差	ベータ
切片	2.111 **	.298	
男性ダミー	.201 **	.077	.094
25-29歳	.305 **	.069	.144
正規ダミー	.033	.094	.016
パート等ダミー	.116	.106	.042
自営等ダミー	.272 *	.131	.077
無職 (ref.)			
中学校卒 (ref.)			
高校卒ダミー	-.131	.254	-.052
専門学校卒ダミー	-.185	.261	-.058
短大卒ダミー	-.020	.266	-.006
大学卒ダミー	-.212	.251	-.099
大学院卒ダミー	-.175	.276	-.042
東京23区と政令指定都市	-.108	.174	-.047
10万人以上の市	-.105	.170	-.049
10万人未満の市	-.167	.179	-.062
町村 (ref.)			
調整済み決定係数	.021 **		
N	998		

** : $p < .01$, * : $p < .05$

まず、属性だけを見ると(表2参照)、性別、年齢層が有意で、男性、若い年齢層が有意に共感的である。職業では自営業(家族従業者を含む)が無職と比べて有意に共感的であった。その他の学歴と都市規模は有意ではなかった。日本においては、宗教教団に入信しやすい、あるいは宗教心を持ちやすいのは、女性で中高年であると一般にいわれている。また、自営業が宗教を信じやすいということもしばしばいわれる。これらの点から考えると、自営業層においては、信仰心もあり、体験談にも共感していると考えられることができるが、男性や若い年齢層では、信仰心はあまりないが、体験談には共感しており、ぎゃくに女性や中高年層では、信仰心はあるのに宗教的な体験談には反発が強いという興味深い関連が見られる。ただ、調整済みの決定係数は .021と極めて小さく、属性だけでは体験談に共感するかどうかをほとんど説明することはできていないといえるだろう。

属性に信仰心の有無と体験談のパターンを独立変数に加えた重回帰モデルが表3の左側である。

表3 信仰の有無と体験談のパターンを加えた重回帰モデル

	b	標準誤差	ベータ	b	標準誤差	ベータ
切片	2.074 **	.095		2.136 **	.098	
男性ダミー	.163 *	.066	.077	.160 *	.066	.075
25-29歳	.308 **	.067	.145	.309 **	.066	.145
自営等ダミー	.239 *	.110	.068	.249 *	.110	.071
無信仰無関心(ref.)						
無信仰関心あり	-.194 *	.081	-.087	-.196 *	.080	-.088
信仰あり	-.357 **	.081	-.159	-.361 **	.081	-.160
非教団	.143 *	.066	.067	.027	.080	.013
聖物を身につける	-.002	.080	-.001	-.182	.107	-.080
悪魔払い	-.191 *	.080	-.084	-.195 *	.080	-.086
非人格神(ref.)						
聖物*非教団				.354 *	.140	
調整済み決定係数	.050 **			.055 **		
N	998			998		

** : $p < .01$, * : $p < .05$

表2の属性のうち、男性ダミーの有意水準が1%を上回り、5%水準になっているが、その他の25-29歳の若い年齢層や自営業などのダミー変数は表2と同じように、有意な変数となっている。信仰心に関しては、無信仰無関心の人を基準変数として、無信仰で関心ありの人、さらには信仰ありの人が、有意に体験談に共感しないことが分かる。

提示体験談のパターンについては、体験談中の「教団」の文字をすべて削除し、「ある人」に置き換えた体験談の方が、共感を得ることができる。これは、日本人が「宗教」という言葉だけで反感を持つことを示している。さらに体験談の内容については、「悪魔払い」という日本的ではない悪魔について、しかも悪いことを引き起こす悪魔を払うというマイナスの状態を避ける呪術的行為が含まれる体験談は、とくに共感が得られなかった。

表3の右側のモデルは、表3の左側のモデルに交互作用項を加えたものである。いくつかの交互作用項を検討した結果、「聖物を身につける」と「非教団」の交互作用項を加えると、宗教的体験談への共感に有意な効果がある一方、「非教団」単独の効果がなくなった。つまり、「教団」という言葉だけを単に取り除くだけでなく、ある種の宗教行為と結びつくと体験談への共感度が高まるということを示している。単純に「宗教」や「教団」という言葉だけが嫌われているのではないことが推測され、何らかの行為や言葉とともに使われるときに、「宗教」や「教団」という言葉は、より激しく嫌われる言葉となるようである。この点については、さらに条件を変えて、試してみる必要がある。

最後に宗教的な多元主義の項目と宗教意識の項目を投入してみよう。

表4 多元主義と宗教意識を加えた重回帰モデル

	b	標準誤差	ベータ
切片	1.093 **	.169	
男性ダミー	.200 **	.064	.094
25-29歳	.320 **	.065	.150
自営等ダミー	.211 *	.107	.060
無信仰無関心(ref.)			
無信仰関心あり	-.047	.083	-.021
信仰あり	-.113	.087	-.050
非教団	.017	.077	.008
聖物を身につける	-.199	.103	-.088
悪魔払い	-.188 *	.077	-.083
非人格神(ref.)			
聖物*非教団	.352 **	.135	.123
完全に真理である宗教あり	.095	.126	.025
ある程度真理である宗教あり	.036	.082	.014
真理である宗教はない	-.207 *	.098	-.067
宗教と真理についてわからない(ref.)			
神はいつも人々の側にいてまもっている	.099 **	.023	.155
悪魔や悪霊は存在する	.071 **	.021	.114
感情を制御して、いつも明るい気持ちを持つ	.067 **	.025	.082
調整済み決定係数	.125 **		
N	998		

** : $p < .01$, * : $p < .05$

宗教的な多元主義の項目と宗教意識の項目を投入すると、調整済み決定係数は .125と10%を超え、かなりの説明力を持つようになる。そしてこれまでの重回帰分析の結果と大きく異なるのは、宗教を信じるかどうかの変数の効果がなくなることである。多元主義についていえば、「真理である宗教は全く存在しない」と宗教について強く否定的な人は、体験談も受容しない。宗教意識では、「神はいつも、人々の側にいて、まもっている」「悪魔や悪霊は存在する」という考え方、すなわち善(神)か悪(悪魔)かに関わらず、超越的な聖なるものを支持する人は体験談を受け入れる一方で、「感情を制御し、いつも明るい気持ちを持つ」という、それ単独では宗教意識とはいえないような、生活倫理的な意識、倫理観を支持する人もまた、体験談に共感する。そして、「信仰あり」「信仰はないが、信仰には関心がある」のダミー変数のマイナスの効果が有意ではなくなっている。つまり、「信仰はなく、関心もない」人たちが信仰のある人たちと比べて体験談により共感していたのは、上に示したような意識を持っていたからである。

ここからは、日本において信仰心がある人、信仰に関心がある人というのは、単純に神や悪魔などの超越的なものを信じる人たちではないし、生活倫理的なものを信じるのでもない、またそれによって宗教的な体験談に共感するのでもないということがわかる。日本における信仰するということと、神や悪魔などのキリスト教的な超越的な存在との関係の複雑さが、ここにも現れているといえよう。

5. おわりに

以上の結果をまとめてみると、体験談に共感するのは、男性で若い年齢層、自営業の人である。「教団」という用語を削除した聖物を身につける体験談は共感される。宗教に真理はないと断定する人や悪魔払いの体験談は共感されにくく、神や悪魔を信じる人、いつも明るい気持ちを持とうとしている人などは体験談に共感しやすい。そして、宗教的体験談は、必ずしも信仰を持った人に受け入れられるのではなかった。

本研究は、調査方法としても試験的なものであり、体験談研究として、前例がある方法ではない。状態遷移モデルに基づく体験談には、多くのパターンが考えられるが、本研究においては、その中のわずか3パターンとそれに「宗教」というレトリックの有無を試しただけで、大部分のパターンを試していない。さらに重要な要因が残されている可能性は、もちろん高い。

また、本研究は、インターネット調査によるものであり、サンプルの代表性が確保されておらず、ケース数も十分ではないという欠点があり、調査結果の信頼性も高いとはいえないだろう。しかし、前例のない調査方法で体験談を調査したところ、属性の効果がある程度みられたことや、信仰の有無よりも宗教意識に影響されるなど、実験的調査手法としては、一定の成果が上げられたのではないかと思われる。

付記

本稿は、科研費基盤研究B「体験談の国際比較研究—物語の構造化を用いた計量的アプローチ」(代表：川端亮、課題番号2330159)の研究成果に基づくものである。

注

- 1) このモデルは、「宗教と社会」学会の「宗教とコミュニケーションプロジェクト」によって、考えられてきたものであり、同プロジェクトの関東学院大学渡辺光一さん、河野昌広さん、大正大学弓山達也さん、國學院大学黒崎浩行さんとの共同研究の成果である。
- 2) ここで用いているのは、マーケティングなどで非常によく用いられているコンジョイント分析である。直交表という方法を利用することで、非常に多くの組み合わせ数が12や18の組み合わせ数に縮約して調べることができる点が長所である。

文献

- 秋庭裕・川端亮 (2004), 『霊能のリアリティへ』 新曜社
- Anderson, R. (1988), *Taiken: personal narratives and Japanese new religions*, Ann Arbor: Indiana University. (=1994, 土岐隆一郎・藤堂憶斗訳『体験ーニッポン新宗教の体験談フオークロア』 現代書館)
- Finke, R. and A. Adamczyk (2008), Cross-National Moral Beliefs: The Influence of National Religious Context, *The Sociological Quarterly*, 49, pp.615-652.
- 芳賀学・菊池裕生 (2006), 『仏のまなざし、読み替えられる自己』 ハーベスト社
- Halman, L. and V. Draulans (2006), How secular is Europe? *The British Journal of Sociology*, 57 (2), pp.263-288.
- 日野謙一 (1982), 「大本教の大正期の発展についてー信徒の回心状況から」, 宗教社会学研究会編『宗教・その日常性と非日常性』 雄山閣, 180-198頁
- Inglehart, R. and W. E. Baker (2000), Modernization, Cultural Change, and the Persistence of Traditional Values, *American Sociological Review*, 65, pp.19-51.
- 川端亮 (2012), 「体験談研究における質的方法と量的方法の統合ー概念と構造に着目した国際比較研究ー」 『宗教と社会』 18, 137-146頁
- 川又俊則 (2002), 『ライフヒストリー研究の基礎』 創風社
- 川又俊則・寺田喜朗・武井順介 (2006), 『ライフヒストリーの宗教社会学』 ハーベスト社
- Lofland, J. and R. Stark (1965), Becoming a World-Saver: A Theory of Conversion to a Deviant Perspective, *American Sociological Review*, 30, pp.862-875.
- 真鍋一史 (2010), 「欧米社会学における宗教理論と宗教調査ー宗教研究における「他者性」の問題ー」 『先端社会研究所紀要』 4, 1-20頁
- 森岡清美・西山茂 (1979), 「新宗教の地方伝播と定着の過程ー山形県湯野浜の妙智會会員調査からー」, 柳川敬一・安齋伸編『宗教と社会変動』 東京大学出版会, 137-194頁
- 島藺進 (1985), 「新宗教教団における体験談の位置: 妙智會・立正佼成会・天理教」, 『東京大学宗教学年報』 2, 1-20頁
- 鈴木広 (1970), 『都市的世界』 誠信書房
- 弓山達也 (2004), 「体験談の変遷とその意味」, NCC宗教研究所・富坂キリスト教センター編『あなたはどんな修行をしたのですか』, 新教出版社, 97-110頁

Acceptance of Testimonies

Akira KAWABATA

Because Japan has a different religious culture from those of Western countries, it has been very difficult, if not impossible, for Japanese scholars to apply European or American theories about religion to Japanese religions. Conversely, Japanese studies have no impact on religion research in Western countries. Thus, it is necessary to overcome the closed nature of religious study in Japan and to conduct international comparative research based on a common framework that will be valid in both Japan and the West. This paper reports results from a questionnaire survey on religious testimonies based on a general model that is independent of the context of any particular religion.

In this paper, we have defined the testimony model as a state-transition model comprising five steps: “initial state,” “practice based on religious teaching,” “result state,” “interpretation of results,” and “change in faith”; each of these steps contains some experience factors. According to this model’s structure, a testimony can be interpreted as an episode experienced by an individual.

Based on the model, we prepared six types of testimonies containing different experience factors, showed one to each of our survey respondents, and asked each respondent if the testimony seemed acceptable to him or her. We performed this Internet survey in 2012 through a research company panel. The survey subjects included male and female Japanese residents aged 25–29 years and 45–49 years. Excluding the ones who disliked religion, the survey’s total sample size was 998 respondents.

In all, 99 of the 998 respondents—about 10%—answered that the indicated testimony was “acceptable” or “partially acceptable,” and 31.2% of the respondents, while not showing any antipathy toward the testimonies, found them “neither acceptable nor unacceptable.” Young male participants tended to accept the testimonies, as did the self-employed. The testimony that included an amulet as an experience factor but mentioned neither a “religious order” nor a “church” tended to be more acceptable than the others. The testimony about exorcism was considered less acceptable. In general, respondents who believed in the existence of God and the devil were more likely to accept the testimonies, as were those who made an effort to retain a positive outlook. The survey also revealed that it is not always true that believers are more likely to accept religious testimonies.

This survey was performed as a pilot study. Although it is necessary to examine all the possible combinations of factors, we have examined only six patterns thus far; the remaining combinations are yet to be studied. Moreover, the Internet survey method may have resulted in some sampling bias, and the sample size was fairly small. However, our data yielded some interesting findings: for example, acceptability depends not on whether a person professes a religion but on what kind of religious mind the person possesses.